新編水滸畫傳 四編 貳

へ21
875
32

門へ逆21
號 875
巻 32

明治三十年
十月十日
購求

新編水滸画傳卷之三拾二

東武　高井蘭山翁　譯編

○石将軍村店ふ書を寄霹靂火秦明ハ五人の豪傑とともに山陣ふ入るゝ小賊ら已ふ酒宴を設け聚義廳の上ふ備へり。五人の頭領ふ秦明を請て廳に上り。各讓りて秦明を上座ふ坐せしめ。五人一度ふ地上ふ跪く慇懃ふ礼を行ひたれバ秦明忙しく礼を復し。同じく地上ふ伏を宋江先言を開く秦明ふ云るハ。総管必ず我輩を恨ミ給ふとあらん。昨日再四総管を山陣ふ留めたれども意を決して留りゐざりしゆゑ某一ッの計を設け山兵ふ内より総管の容貌ふ似たる者を擇ミ出して足下の衣甲を着せしめ。又彼馬ふ乘しめ狼牙棒を持せ直ちふ青州城の西を攻

さる。多く軍民を殺し、又燕順王英別に五十餘人を領して副ふれ門に推寄せ、詐り呼び秦總管が眷族を連て城外に送り出せり。彼ら忽ち此戦を踏淡し。一片の平地に出ずべしと罵りければ、府尹大に怒り却て總管の夫人を殺せり。是則某ら總管一向家に飯んと欲ふ念願を預ども先過失を絶さんが為。彼計を行ふく府尹が怒りを惹出し。乃府尹が為を依て夫人を殺さしめぬ。尤不仁不義の所為なれば只々いつかもしら總管を此山陣に留こと已ことを恨もて。こゝろ詐の謀を施し早ぬ。併して願くは。總管某らが彼まで慕ひ敬ふの誠を察しめゝひ。只曲く罪を免しめへ。独ばば某らが幸ひ伝のうを過ん。秦明此言を聞心中甚だ怒り。宋江に向て厳併んと欲ひられ。又却て熟想ひるに。宋江に対ては無尤毒悪こゝろを原我を山陣に留んと思ふ好意なり

生しも況や我今厳併んとせば必ず非命の死を遂る。一生れ豪傑武名益ふく廃れん。先曲くられを忍びんと則怒を納めて云ふ。諸豪傑さまで我を山陣に止んとの好意は我も又深くこれを感激とす。されば我が妻子を府尹が為に殺さしめんことは甚だ以て不仁不慈。我悲歎の思ひ何を以て保んぞ。慰むべき宋江が云某らの如くの計を行はば。總管豈あく心を傾け意を投る。我が輩と共に山陣に足を留めあらんや。夫人已に死しぬる上は空しくこれを悲みぬとも益あらじ。幸ひ花知寨の妹は賢淑にして美し。我此婚礼を主つて花栄が妹を總管に嫁せしめ。もし總管我輩一点の真誠を感て此義を兼引しめんは。秦明此時宋江が他念なく愛敬をもてこゝろ方に心を安んぞ。乃ち浅に應ずり。諸の豪傑こゝに於て大に悦び。遂よ

宋江を請ぜ中央に坐せしめ。秦明を左に坐せしめ。花栄を右に坐せしめ。燕順等三人領ハを次に坐を列ねしぶ。小賊ら頻て美酒佳肴を携へ廳上に設け。笛を吹鼓を擂く大ひに酒宴を催しぬ。扨又宋江ハ諸の豪傑に問く清風寨を撃んと計を商議する処に。秦明ハ云清風寨を打んこと極く易し。何ぞ必しも諸豪傑の心力を費さんや。幸ひ彼黄信ハ某が武藝の才子中に交り尤厚くれバ。某明日先清風寨に孤く黄信に寨門を開せ。又宜しく彼を誘め。我輩に降らしめ則ち花知寨が眷属をも取出すべし。且又劉高が妻を捉へ来長兄の怨に報ひ恨を雪き。聊以て進見の礼を表すべし。只恐れ列位某が不存に従ひ。宋江大に悦び。総管もいよいよ肯てかくのごとく計を施しぬ。莫大の幸ひし。明日宜しくこれを行ひ。とて。衆皆喜悦して酒を酌。酒宴已に了れば。夜ハ各房間に入て歇む。翌日早飯後より諸の豪傑甲を着し盛を戴き。結束最に壯ひ。秦明先るに乗て山を下り彼狼牙棒を提て飛ぶ。清風寨に孤ぬ。時に黄信、最密に清風寨を守り。多くの兵を備へ昼夜警しく防せり。此日一人の兵黄信に告て云。秦総管唯一騎。寨外に孤て。門を開けと。黄信ハ聞て忙しくに乗直に門の辺に来て。門外を望み見る。果しく秦明只一騎。寨門の外に立。黄信兵に命じ。吊橋を下せ門を開しめ。自ら秦明を迎へて寨中に至り。直ちに大寨の公廳に前に下りて。両人手を携て廳に上り。賓主の坐已に定り互に礼を叙ぶ。黄信先問て云総管ハ何の故只一騎ならんや。此時秦明清風山の戦に打負て次第に山東の及時雨宋公明

花英
以妹
配秦明
粤山柏恰
柏恰部屬

義を重んじ財を軽んじ天下の豪傑と交りを結びさらにあく人の危急を救ふ。人皆是を敬ふ。今此人難を避災を脱れ清風山に在り我も此回禍を蒙り身を立命を安んぜざるあく宋公明が德を慕ひ終に清風山に入る宋江ホと大義を結び四足下ハ幸ひいまだ妻子もあらざれバ何の顧もなし唯宜しく我言に従ひ共に清風山に入て一処に豪傑を求し彼文官ホど欺きを免れんや黄信が云長兄今清風山に足を留く宋江ホと義を結びゆんゆんと誠に豪傑の交りと某豈あて長兄の教へに従ハざらんや扨かの宋公明の山陣に居ることを審くを聞ず及時雨ハ此の時清風山に来りあひしを秦明打笑て云汝先日清風山に奪ひ来れし罪人彼郭城虎張三と云ぬるを乃ち及時雨宋公明と本姓名を隠して云ざるハ阿婆惜と

云女を殺しことあれバ又此ことを発んを恐れ唯伍く張三と名を報こうしと黄信ことを聞大に悔て云るハ某り夢にも宋公明と知しめバ宜しく放ち免んづるものと唯劉高が一片の言を信て已に義士を害せんとせしを悔れ今更後悔何の益あらん秦明が云汝ものと宋押司を知ざりしことあれバ何ぞ再三悔に及ぶんと両人まさしく公廳の内に在く議論して居る処に忽ち一人の兵来り報じ曰ハ寨外に両路の軍馬金鼓の響き有く寄来ぬるあく防ぎの備をせんと秦明是を聞て必定宋江ホが人るあらん少しも驚くことなかれと黄信と等しく馬に乗寨門の辺に打ふけ来り門外を望に両路の軍勢に近くと弛ることなく一隊ハ宋江花栄又一路ハ燕順王英あり百四五十人を引率せり黄信これを見て心中に悦び則兵に命じて

吊橋を下し。寨門を開せ自ら両路の人馬を迎へ。寨中ゑ進せられぬ。宋江諸軍ゑ號令を下し。一人の百姓一箇の寨兵をも傷ハしめず先南寨ゑ兵を進め。劉高が春族一く都く斬尽せり。此時王英ハ自ら先劉高が妻を奪取しぶ。小賊らハ皆家内を捜し金銀財宝悉く奪取く車ゑ載又花栄が妻子妹を轎ゑ乗しめ。家財ゑ悉く車ゑ載諸ゑ全く調ぶ。諸の豪傑と再び清風山ゑ弛回り。遂ゑ山陣の聚義廳ゑ於く會合し処ゑ。黄信頓て諸の豪傑と礼を叙則ち花栄が次ゑ座を定め。此時宋江懇ゑ花栄が眷属を一軒の房間の内ゑ歇しめ。又劉高が財宝を分諸の小賊ゑ与へ褒美し。各欣〻然として喜ばり。宋江又左右ゑ問く。劉高が妻ハ今何もの処ゑあるや。王英答く劉高が妻ハ某こを捉へ来り。此度ハ我ゑ与へ妻〻しめんと燕順が云汝ゑ与へんとふ。商議を容く与ふ。宋江曰く彼を呼せ我彼ゑ遇く一言を云ん宋江も亦云我まく彼ゑまゝへく問べきとあり。ゆく彼を呼せんや王英これを安て乃ち劉高が妻を廳前ゑ呼出しられバ。彼妻泫然と涙を浮べ只顧慌しく叫び宋江大ゑ怒て云汝悪婦我向ゑ好意を以く汝を救ひ。汝なんぞ恩を仇と為して我を害せんとしぞ。汝今日天罰を蒙り再び活捕れ犯敢て分説ら。燕順これを安て忽ち躍起く云ふ。これ汝悪婦ゑ對して何ぞ問ん只速ゑ刑を加く恨を雪んゑハ去れ〻とく。刀を接て首を落しられバ王英これを見く大ゑ怒り。忽ち力を揮て燕順ゑ斬く蒐く。宋江ゑ急ゑこれを練く。燕順此女を殺せしを良ゑ理あり。汝彼女が毒悪を知ぬ。我向ゑ汝を勸めて彼女を救ひ

彼却て夫劉高をして我を殺さんと圖りぬ。汝り彼を留て身辺ふあらしめば孚竟損ずく益あらじ。我他日聰明の佳人を擇ひ生して配まべし。必ず子まゝて兄弟の好こを壞ことあれ。燕順云王賢弟うまく宋長兄の言を曉さば彼女を殺しゝと尤怨とまるふ足ぬ。若彼を饒して妻とせば久しうして後必ず彼ふ害せらるべし。よろしく怒りを息て我を恨ずあれ。王英諸人ふ諫言せれ。唯黙然として言ひ燕順又小賊ふ命じ。悪婦が屍を乗さしめ頓て酒宴を設け飲酌を催し。夜三更の左側ふ孟を収め。各まくふ歌ひ日宋江ハ黄信と同じく。婚礼の主とありれば。燕順王英鄭天壽三人ハ媒とあり。花栄が妹を秦明ふ嫁せしめ。一連ふ三五日酒宴を設け。山陣大ふ熱閙り。既ゆく又五七日をへ哨の小賊山ふ上り来て宋江ふ告ゝ。青州の慕容府尹文書を朝廷ふ献り秦明黄信花栄ふ謀叛を企て清風山ふ陣柵を構へ。奏聞せるふ依て近く大軍を発し清風山を攻破らんと風説専らし宜しく官軍を防ぐの計を施し。諸豪傑是を聞各商議して云ゝ此山ハ原来小陣あれば。永く止らん地ふあらじ。若京より大軍寄来て四方を取圍む。進退意ふ任せじ。防戦叶へじ。若一旦兵粮尽ば必定脱れ難ん。豫じめ先謀を定めて可ならんと評議区区なる処ふ宋江が云我已ふ思ふ所あり。諸豪傑の意ふ合んや。各是を聞。長兄已ふ良計あらば速ふこれを告よ。宋江が云是より南ふ梁山泊と云地あり。方円八百餘里。其中ふ死子城蓼児洼と云最堅固の要害あり。今晁天王と云人三五千の軍馬を集めて。厳ふ水泊を守りて官軍を大ふ

恐れ敢て来り犯さと能はず。我輩宜しく人馬を引き梁山泊に
上り晁天王に勢を合せ官軍を防ぎ保ち恙なかるべし。
秦明云若かくのごとき要害の地あらば幾ひろく千万の官軍来る
とも何ぞ憂へあらん。只恨らくは我が輩を薦遣りし人もかの宋江
毎緣ゆゑ卒に住べきかは往々彼又いかんぞ我が輩を留めや。
きぐうく有緣の人を求めて導を頼み往べし。宋江笑を含て彼生辰の
礼物十万貫の金銀珠玉の事并に劉唐が持参せし書簡を閻婆
惜に奪ひ取れ。遂に止まるを得ずして。閻婆惜を殺しまゐらせ。一く詳に
語りまゐれば。秦明大に悅んで云。已に長兄は梁山泊の大恩人
なり。若事延引に及ぶ不可あらん。早く此処を收拾て梁山泊へ趣く
べしと。乃ち日商議を定め。山陣の金銀米銭十餘輛の車に載せ。
又諸豪傑の眷族を都て輪に乘せ。都合三百餘疋の戰馬を牽せ。
凡五六百の小賊を三路に分路し言を作く梁山泊を攻る官兵
なりと称へ。已に山陣を火を放て。房屋尽く焼拂ひ宋江を
花栄と共に八九十の軍馬を領し。第一番は山を下りれば。秦明
黄信も同じく八九十人の軍馬を引て。第二番に山を下り。燕順王英
鄭天寿に三人は二三百の人馬を率し。第三番に山を下り。諸の豪傑已に
清風山を離れ。梁山泊へ急ぎ。諸州諸府に許多の軍馬を備へ防
禁しかれば。宋江に當先に大旗を持せ旗の上に大字を以て收捕強賊
官軍と書しめ敢て咎ざる族一人もなかりされば已に五七日許過ぎ
青州を離れしを甚だ遠ざりぬ。宋江に三路の人馬一日間に
二十里ばかりを隔て隊伍を堅固に列ねて路を横ぎりて

ちゆ對影山と云処ゐ至り以此間ハ両辺都く險阻の地勢ゑりる処ゐ
前山の内より金鼓の声大ゐ響きくれバ花栄ゐのたく前面ゆを必ず強賊
有べしと。乃弓ゐ箭を搭急ゐ一人の騎兵を後軍ゐ遣ハ〳〵ゐ馳
至ぐきことを催促せ宋江花栄先二十餘騎の軍馬をゑ向ひ前
半里ばかりゐ至く路を尋ぐる処ゐ忽ち一彪の人馬馳出ぬ凡其人数
百十餘人ばかりあくんとゑく。紅旗を持せ。年若の大将當先ゐ進
来る宋江ゐ遥ゐ彼大将を見ゐ頭ゐ三叉の冠を戴き身ゆを團
花の甲を着し。威風堂々として赤馬ゐ乗方天戟を横へ大音声ゐ
呼りくるハ。今日ハ必ず勝負を決ぐくゐ。早く出よと云も能らざるよ。
又山の背より一彪の兵馳出ぬ。その勢同じく百十餘人ばかりして。
年若の大将當先ゐ跑来る。平装束をゑるゐ頭ゐハ三叉の冠を
戴き身ゆを鎖鋏の甲を着し。ゐハ方天戟を提げ白馬ゐ乗威風凛々
として。好き一人の豪傑ゑ。左右ゆを白旗を風ゐ飜し。金鼓をあげく
打鳴し。両軍関の声を発し。已ゐ陣勢を對しゑる処ゐ彼両人の大将
馬を近くと進めく。互ゐ方天戟を輪し各威を爭ひ鋒を交へ一往
一来秘術を尽し相戦ハハ龍虎の爭ひ如あくんとゐいま。刺バ躱し
刺れバ閃く。精神益盛ゆく。闘コ一ゐ五十合ゐ及べども。更ゐ勝敗
分ゑしゑ。宋江花栄ハ馬上ゐ在く此戦ひを見く大ひゐ感歎ゐ堪
ざるゑ。花栄謝馬を近く寄。彼両将戦ひ已ゐ神妙ゐ
入る処ゐ両将ゑ戟の上ゐ附ゑる鞭一ツハ金銭豹子の尾一ツハ金銭
五色の旗遂ゐ相攪れ扯分つと能ハざりくバ。両将互ゐ焦燥ゑり。
花栄ゑ見ゑ忙しく弓箭打搭へ豹子の尾を駆く恰も満月の

ぢく拽く兵ど放てば弦前忽ち豹子の尾ふ中く根もとより射断しうば。二本の戟忽ち双ふ分れぬ。此時両陣の軍士共一齊ふ声を揚く誉に ろり。彼両将こゝを元く大ふ驚き。各且戦を休く直ちふ宋江花栄が馬の前ふ馳至り。身を屈く云々。将軍の神箭人の及ざる所ゑ。願くハ大名を知らしめゑ。花栄馬上ふ在く答て云々ハ我が此美兄ゑ。則ち鄆城縣の押司ゑ。及時雨宋公明と云人ゑ我ハ又清風寨の知寨小李廣花栄と云者ゑ。那両人の豪傑此言を聞と等しく。馬より跳下り恰も金山を推し。玉柱を倒ごとく跪き拜く。地上ふ拜伏し。共ふ慇懃ふ云々。両位の大名をば久しく何の幸ひふ今日尊顔を拜まゝ宋江花栄こゝを元く。同じく急ふ馬を跳下り。両人の大将を扶け起して問ハ。各ハ誰人ぞ。我が輩を敬しまつる。望らくハ名を告ゑ。彼花園の中を着ゑ大れ先巻て云。某が姓ハ呂名ハ方と号す。原潭州の者ゑ。某平生武藝を好ゑ。這方天戟を使ひ慣ひぬ。人皆某を称しく小温侯呂方と云。某向ふ某種を運ゑ。山東ふ到ゑ。処商賣ふ本銭を失ひ故ふ ふ。能ひして。権く先此對影山ふ足を留め。独自ら強盗の領と なり。若干の人ゑを集め。家を打舎を劫し。多くの金銀財宝を奪取。今日の営極めく豊ゑ然ふ此豪傑檀ふ此処ふ到く。我此山陣を奪取。各二ツ。ふして互ふ一ツを守んと欲ゑ。我肯くこれを攘らぢ。毎日戦をなすといへ。唯雄を分くれば此のごとし。今日天良縁を假し。及時雨の顔を拜し。殊更花将軍ハ神箭を一覧し。喜び望外ふ。願くハ向後教を垂ん。宋江又

彼鎖鏡の甲を着たる豪傑ゝ向ひて云。足下のたる姓大名ハいかん。答へて
某が姓ハ郭。名ハ盛と号す。本西川嘉陵の者ゝ。某初水銀の商賈を
なし。遍く諸州諸府を回りぬる処ゝ。前年黄河を渡んとして大風ゝ
船を翻され。這ゝ一命のみ脱れしのみ。故ゝ回ること能ハず。唯容路ゝ流
落す。日を徒ゝ過しぬ。某幼き時より我々の兵馬提轄ゝ従て方天
戟を学び漸ゝ熟練しぬ。人皆某を呼ぶ寨仁者郭盛と云
慣せり。世間ゝ沙汰しなり。對影山ゝ一人の豪傑ありて。強盗の頭領を
なし。究竟能方天戟を使ひ熟せりとて。嚇怕るなり。某これと武藝を
試ん。方天戟の高下を比べ。我彼ゝ勝ることあらば。山を奪ひ取ん。
我が住所ゝせんと。斯毎日戦ひ。更ゝ雌雄を分さんと。
今日上天佳縁を賜へ。宋押司の高風を接へ且花荑軍の神箭を

一見し。大悦雀躍のあまりゝ。両公に某が卑賤を厭ひ給ハぬ
某あるべく両公の下風ゝ順ひ奉べし。宋江大ゝ悦て云。我今両豪の為ゝ
和睦のことを調んゝ敢て承知あるべきや。両人の豪傑を少て大に
悦び早速領義ゝ及び処ゝ。後軍の人馬。尽く皆已ゝ到しぬ。各
悦んで一ゝ對面し。呂方先諸の豪傑を請ん山陣ゝ上り牛を殺し
馬を宰して大ゝ酒宴を設け。飲酌已ゝ半夜ゝ過ぬ。罷りなれば
夜ハ衆皆呂方が山陣ゝ休ぬ。翌日郭盛も又席主となり。
酒宴を設け。諸の豪傑を款待しなり。宋江頻ゝ彼両豪を諫め。
同ゝく梁山泊ゝ誘引しなれば。両人の豪傑大ゝ悦び。早速を練ゝ従ひ
各人を聚め。財宝ゝを收拾め。用意を調へ山を下らんと商議する処ゝ
宋江が云。権ゝ先兵を起して梁山泊ゝ

石勇
謁及時雨

呂方
郭盛
爭雄

趣を。彼地の哨の者は我が假旗の文字を見て。絨の官軍と思ひ。急ぎ
馳く晁天王に報ぜん。是忽ち一發動に及ぶべし。然らば我輩彼地を
開しゆるに似たり。我は先燕順と共に先に馳く梁山泊に。かくと
告ぐるせん。足下らは都て後より進む。猶三日に分れ来るべし。花栄
秦明が云長兄の言尤可なり。既に彩のごとくんば長兄は速に燕順を
引く先に往くべし。我が輩は後より進発まべし。宋江此時燕順と仰ぶ
ら十餘人を後へ馬上にて路を移ること已に両日なり。此日午の
刻に及んで小戦せ。甚だ疲れしぶ。宋江を憩しめんと欲し。燕順と
ともに酒店を尋ぬ求め馬を下りて酒店の内を望みるに。先達て一人の
大漢子。店の内に大座の上に坐しめる。宋江此漢子をみるに。頭
は猪嘴中を戴き身は皂袖衫を着し。腰は白胯膊を紮ひ
足は八答鞋を穿。座の傍に短棒を置く。凡身の丈八尺許
にして眼の光は恰も明星のごとくなり。宋江先酒店の小厮を呼び云ふは。
我が同行の者多人数なるに。大座を借て坐せしめんや。小厮が云く。
此方は極めて易しとて。宋江燕順を延く内に入れば宋江小厮に
命じて云我が家人ども。ここに此処に呼入て酒を飲しめよ。小厮答て
いはく。前面は猶大座あり。彼所に酒を飲しめんとて。前面に
走り出宋江が家人共をみるに。壇の辺に在れば。小厮頓て
彼先達に来りて漢子に對し。芙容の坐しめる大座にて。此
多人数の客を坐せしめん。芙容は宜しく小座に移りしめんや。彼
大漢子甚だ焦燥く。我は是先に来りし者なるに。何ぞ後より来る
者に座を譲らんや。我決して座を移さじと。大小厮を白眼にらみ。

燕順此躰を見て宋江に對して云ふ。長兄彼漢子が言を聞しや甚だ無礼と思ふる。宋江が云彼無礼をあらば。彼に任せ無礼を
なさしむべし。何の咎ふ足らん。燕順是を聞て自ら忍び居る処に彼漢子
又宋江燕順を見て。一向あざ笑ひ居ふ。小厠に慇懃に彼漢子に
對して云ふ。願くは笑客某が為に座を換へよ。某は商賣を遂
しめん。彼漢子大に怒きて汝ぞかく人を欺くぞ。我此座を換さし
めん人は當世に三人とよはれあり。汝無益の言をいふより。耳に口を
聞く声を出して。若再び言を吐く我を犯さば此拳汝を饒
きぢ。小厠が云我ら笑客を犯さふ。何ぞ形のごとく罵りあるや。
彼漢子弥怒て云。汝犯声を側るや。必ず拳を清く後悔せよ。燕順
笑て怒りに忍びぞ。忽ち声を放て怒るは汝は何者ぞ。再三
無礼を云や。必ず我が怒りを惹出して悔ることなれ。彼大漢子大に怒り
傍に置る棒搏取躍出燕順を瞧て云ふ。我自ら小厠を罵るに
汝これに干て我を犯ちらん。我普天の下に於て只両箇の人に遭る
のみ。若此両人を除く餘の人は都て我が脚底の泥のごとし。汝無用の
威を振て笑を受るとなれ。燕順大に怒り。急に発を取て只一打と
跳出ぬ。宋江は暗に彼漢子が言の俗なるを少て心中に愛し。忙しく
走り出て両人が中に身を横て諫て云ふは。両人必ず手足を動ることを
なかれ。我先旅客に問ん。汝が今云し普天の下に於て只両箇の
人に譲らのことを。誰をさして云ぞや。彼漢子が云我らし彼両人の
名を云ぐ。汝も必定大に驚くべきぞ。宋江が云。願くは其両人の名を
聞ん。彼漢子が云汝頻りに聞んと欲へば。我肯て是を聞しめん

両人の内一人ハ乃ち滄州横海郡の柴世宗の孫小旋風柴進
柴大官人と云慣ひ人のことく宋江是を窃く暗ふ頭を點き。乃ち
再び問ふ云又今一人ハ誰ぞ。彼漢子ゞ云彼一人の名を云ざる聞
汝ゞ恐懼して眼を眩ひとあれ此人ハ是名ハ天より高く德ハ
地よりも厚し乃ち鄆城縣の押司山東の及時雨宋公明と云人也
定めて汝らも嘗て及びつゝん。宋江是を窃く燕順を顧て暗ふ咲を含
ゝり。燕順ゝや発を棄て。怒を息くれば。彼漢子又いとく。我も今云ふ
両人ゞふ除きまゝ。継ひ當朝の大宋皇帝ゝりとも。又是を怕ど。汝何
ぞ発を棄ゝや。宋江ゞ云汝怒りを息よ。我且汝ふ問ん此両人ハ我為
ゝ。原来朋友ゝ汝ハ又何ぞの処ゝ。此両人ふ遇ゝや。彼漢子ゞ云汝
既ふ此両人を知ゝば実ふ語ぐし。前年我柴大官人の館ふ四五ヶ月

逗留して柴進とふ尤親しゝれども。及時雨ゝハ未ゞ對面せざゝ。
宋江ゞ云然らば汝を未ゞ宋江ゝを遇ざるよ。彼漢子ゞ云我一ゝの
友有ゝ今急ふ宋押司の居ゝふ尋往んと欲を。宋江問て云
汝ハ何ぞのゝを有て宋江を訪ゝや。彼漢子ゞ云宋押司の書簡
子宋清我を頼で一封の書簡を寄せゝる故これを届んゝ。宋江
是を聞て大ふ悦び忙しく向ひ進んで云ゝハ。誘ふも縁あれバ千里
来ゝ相見ゝ。縁なれば面を對し相逢ぎと云ハ果して此言の
其宋公明ゝハ乃ち某ゞゝ。彼漢子ゝを窃く大ふ驚き怨ち
地上ふ拜伏しゝく云ゝハ今日ハ我為ゝ大吉辰ゝく。想ゝ長兄の
顔を拜ゝ。大ひふ平生の渇想を慰めぬ。ゝ天此良縁を假
ゝ孔太公ゞ館ふ尋ね行ぐふ此処ゝくまゝ

と。誠に莫大の大幸。此時宋江彼漢子が名を推へ内に入則問く云々るハ足下の大名ハ何と号しものや。彼漢子答て云某姓ハ石名ハ勇と号す。原大名府の者。某常に博奕を以く過活とす。人皆某が諢名をつけて。石将軍と称す。某前年賭博の上にて爭ひを惹出し。只一拳に人を打殺して。故郷を逃出て。ちに梁大官人の館に身を躲して。難を脱れぬ。世間の人多く長兄の八名を吹噓して。徳を称するを。某大に長兄の高風を慕ひ。這般特く鄆城縣に地て長兄を訪ひ。ものに長兄も又事を惹出し。他に出ぬしと。甚だく憂に逼り。然れせ今弟宋清公に對面する処に。宋清公いたれ〳〵ハ長兄ハ白兎山孔太公が館に居ものなる。某彼地に急行ば幸ひ急事の書簡を寄ておきたるなり。某乃ち書簡を携へて孔太公が館へ来ね往んと思ひ。まづに今此処に至れり。宋清公再三やさしハ。何ぞ急用ある長兄従ひ何等のよう有とも。必ず一刻も早く回りもくとのたまへ。宋公此言を聞く心中に疑ひ又問く云るハ。足下我が家に幾日逗留有るや。又うく我父に遇ひぬるや否。石勇答て云。某只一夜貴宅に歇しうば。る父宋太公に於に見えざりし。宋江又此四梁山泊に上らんとする次第詳に語りうれば。石勇がいとく某向に梁大官人に離れてより以来諸州諸府に徘徊して長兄の仁名を聞て。恰も雷の耳に貫くが如く。這遭長兄梁山泊に入ぬるを。某をも携へ往ばやと。宋江が云此の九安し先宜しく燕順に對面しもくと。頻く燕順を呼でまねしに。則主に酒を求めく暫く飲酌に及びぬ。此時石勇宋清が書簡を出し。宋江に

渡しくれバ宋江是を接り。先上包をくくるを逆ふ封じ。曽く平安の二字を書き。甚ぐ心中疑ひ忙しく披き讀ふ。父宋太公。今年三月五日ふ病死あり。然れども孝喪を停く家ふあらしめ。未ざこれを葬らず。長兄ふく帰ひ共ふ喪を移ひ宜しくこれを葬りなん。長兄の飯りを待のくとありくれバ。宋江これを讀をり大に驚き。忽ち声を放く再三哭悲こ。淚ハ袂を湿しくり。燕順石勇齊く諫んとせし。処ふ宋江哭の餘り遂ふ眼を眩し。地上ふ倒をれバ燕順石勇大ふ慌張。急ふ水を灌ぎ口ふ入れ。久く甦醒しめくり。此時宋江淚を拭く云くを。両人の賢弟某が一言を聞くべし。我聊寡情薄意を以く云ふあらば。実ハ只一人の老父ありしのみ。独こをの心ふ忘るるの常ふ寢食を保ぜざりしふ。這遭終ふ死去ありしが。宋清礼を我ふ譲りて。擅ふこをを葬らば。我曽く兄弟同く共ふ葬らんとあれバ。我宜しく急ふ回らぎんバ有べからず。足下らハ暫く梁山泊へ上りゆく。燕順練めて云る父の逝去ふ依て家ふ回らんとあるくバ。重く梁山泊ふ上りあるとも有まじくれバ我輩再び長兄ふ會合せんを。極めく難くべし。世上の父母ハ久く死せざるハ先心を寛げゆひく。某らを梁山泊ふ引つれ。已に其ハ期ふ到りあるを。某もとふ長兄ふ從く鄆城縣ふ回り。宜しく出喪の儀を調ぶべし。古の語ふも蛇頭あれバ必ずと十あるふ。長兄ハ此ふ回りゆひバ我輩のいんぞよく梁山泊ふ上らんや。晁天王ふも又いんぞ敢て快く我輩を留めんや。願くハ長兄明らかふこれを察しるく。宋江ガ云我ガ足下ふを引く梁山泊ふ上り而して後家ふ回らん。

小李廣
神箭
射雁
梁山

許多日の差あり。是則ち蒋を缺ふ似なり。千里ゆく喪に走り難ふ走る子なり臣なる者の擄るき天理に。我只一封の書簡を修へく。備細を晁天王ふ云遣はべる。汝宜しく此書札を携へく。石勇ふ先梁山泊ふ行くべし。我今老父の死去をゆくしば日をるべを年の正。已ふ眉を焼の急ふ遭。いんぞよく日を延んや。此上ふ我独自ら連夜ふ馳く一刻も急ふ家ふ回らん。必ず誤る我を怪とおもへ。燕順石勇再三留しうる。宋江終ふ留らず。頓く紙筆を索く梁山泊への書簡を修へ乃ちこれを燕順ふ与へく収しめ打立べしと急しく。燕順が云長兄先暫く待へ。秦総管花知寨も少刻此処ふ到べきふ再び相見の上発足しるべし。何の遅きとあらん。宋江が云何ぞ再び相まつふ及ん。梁山泊へハ。我が書簡ぶふ携へおバ。曾く異儀あるべし。汝両人我が為ふ宜しく緒豪傑へ言傳へらるべし。我今燃眉の急ふ遭只一歩も早く家ふ回り。老父此喪を勤んと欲も。必ず他日の恭會を期べし。互ふ慈愛ん。こと。要あれとく。遂ふ酒銭を償しあく酒店を出宋江又自ら乗し馬を石勇ふ与へて云。汝ハ原来馬なれバ宜しく此馬ふ乗く梁山泊へ馳行べしと。又三人を携へ涙を注然再三依くとして別る。後惜みしうども宋江今ハ已ことを為ぶしく。遂ふ燕順石勇ふ別れ直ちふ故郷へと馳行う。されバ燕順石勇思ふ宋江ふ別る。大ふ怒へ漸四五里許馳く旅宿を求め。夜ハこふ歇で後軍を待う。翌日辰の刻秦明花栄諸の人馬悉く此処ふ到りられで。燕順石勇こを迎へく相まく。宋江此度父宋太公の死去故。遂ふ皈

郷しくこと詳に通じくれば。諸の豪傑燕順を怨みく云々。
足下ハ何ゆゑ宋押司を留ざりしぞ。宋押司飯りゆゑ上ハ我輩梁
山泊へ行こと能あまじ。石勇が説して云宋押司這次宋太公の死
去を聞ゆゑ。己ゑ自殺をも遂ゆべき。摸様なりゑ我輩ゆゑ
能留ることをゆんや必ず誤く。我ら両人を恨みとなれ行幸
希ゑ宋押司一封の書簡を遺し。云ゆひぬるを。此書札ゑ梁山
泊よ携へゆバ晁天王ら必定我輩を山陣ゑ留んず。先早く梁山
泊へ馳行けとのこと。花栄秦明王書簡を見乃ち諸人と商議
して云々。我ゑ輩已ゑ途中ゑあり。回ゑも又回らじ。散ゆも又
散れぞ。進退両ゑ難し。只宜しく宋押司の書簡を携へて先梁
山泊ゑ上ぶべし。晁天王ら肯く留めぞんバ。別ゑ又商議有べし

と。総て九人の豪傑兵を一所ゑ合せ。救百の人馬漸く梁山泊へと
進む。

○小李廣梁山ゑ雁を射

偖も諸の豪傑梁山泊へ入んとて。一ツの大路を求め山ゑ上り。已ゑ芦の
内を過らんとせし処ゑ。忽ち水面の上ゑ金鼓の声大ゑ響くしゆバ。秦明ら
諸の豪傑こを聞ふ。山ゑ漫野ゑ遍く色々の旗を建ゆ。水泊の
中より二艘の快船を漕来り。当先ゑ進ぬる一艘の上ゑハ。三五十の
小賊衣を連ねく群り乗。船頭ゑ一人の豪傑甍の上ゑ坐せり。
是則豹子頭林冲なり。後より進む一艘の船の上ゑ。又三五十の
小賊群り乗く。船頭の甍ゑ高坐せるハ。赤髪鬼劉唐なり。此時
林冲先秦明ゑ人馬を止く。忽ち呼り叫く云々。汝らハ何れの

州より来る官軍ぞや。敢て我輩を捕へんとこそ思へ。去来
汝らを一く殺しく。我此梁山泊の利害を知らしめんと罵りける処。
秦明花栄ハ忙しく馬を下り。岸の辺ハ立注り乃ち荅て云ける。
我輩皆官軍にあらず。山東の及時雨宋公明の書簡を携へ山
陣ハ加らんとを願ふ者なり。必ず疑ひを起しそ。林冲が
云へ果しく及時雨宋押司の書簡を携へ。ひハ須く前面の
朱貴が酒肆ハ入く先書簡を山陣ハ遣しえせしめ。上ぐ
宜しく相見せしと。則青旗を把く。只一麾招きける処に芦の
内よりまや一艘の小船漕出るが船の上ハ三人の小賊あり。一人ハ
船を守りしぶ。二人ハ岸の上ハ跳上り。頻く秦明ら兄人を引く。
朱貴が酒肆を望んで馳る処ハ。水面ハ二艘の哨船と又一艘の

快船漕出るが。船の上ハ白旗揺動し。金鼓奔しく鳴れば。二艘の
哨船兎ぶく漕回り。彼方知れぬ隠れ。秦明花栄の諸豪傑此
処の要害を詳く。大ハ驚て云。誠ハ希有の険所なり。官軍いかぞよく
此所を犯しぬん。我輩ら此山陣ハ足を留ハ。究竟禍を免れべし
と。遂ハ彼二人の小賊ハ。朱貴が酒肆ハ走りしハ。朱貴自ら
出く秦明ら兄人を迎へ相見し。則書簡を乞取くこれを見。頻く
害箭を放く芦の内ハ射入しハ。一艘の快船箭の害ハ應じ漕
来りこれを朱貴書簡を小賊ハ与へ先山陣ハ届けり。朱貴又小賊
らハ命じて豊ハ酒宴を設け九人の豪傑を歓待。夜ハ皆く朱貴が
後廳ハ歇り。翌日辰の刻ハ。軍師吳学究自ら山を下り。朱貴が
店ハ到り。則九人の豪傑を請く一く相見え。各礼を叙了て来意を

詳ふ問ふる処ふ。ちや二三十艘の小船を漕来り。呉学究朱炎并ふ九人の豪傑を請く船ふ乗しめ。諸の春族を餘人馬迫船ふ乗しめ。諸船一齊ふ漕出し。直ふ金沙灘ふ到り。此処より衆皆岸ふ上りし処ふ。晁蓋ハ諸の頭領と共ふ。此辺ふ出て秦明ら九人を迎ハ。直ちふ延く関を越。山を登く陣中の聚義廳ふ到り。各皆賓主の礼了りし。左の方ふ晁蓋呉用。公孫勝林冲。劉唐。阮小二。阮小五。阮小七。杜遷。宋万。朱炎白勝ふの豪傑椅子を並べく列座せり。扨此白勝ハ原済州の牢中ふ在しかども。救月以前牢を越く逃出。直ちふ此梁山泊ふ来く。身命を安んぜり。是本呉学究が計ふ因く。白勝遂に一命を脱れくりとりや。又右の方ふハ花栄。秦明。黄信。燕順。王英。鄭天寿。呂方。郭盛。石勇が椅子を並べ。連り坐せり。総く二十一人の豪傑。

両辺ふ相對し。座の中央ふ一炉の香を焼。各誓ひをほし。苗を吹。鼓を撾。牛を殺し。馬を宰しめ。大ふ酒宴を催しくり。此時秦明花栄ふ宋公明が徳を称し。清風山ゆ劉高を殺しくこと。逐一明細ふ説話るふ。梁山泊の豪傑ゆとしく是を歓迎せ。後又呂方郭盛豆ふ方天戟を以て。闘しを和談せしふ。且花栄戟の雕。金銭豹子の尾を。射断くこと。まで語るふ。晁蓋心中ふ未だ全く信せぎして云くそ。花知寨若果しく。かく弓箭の達人ならバ。當山陣ゆも聊射藝の族あり。異日必ず射術の比試を一見ぎしと。又盃を執く相勧め。酒已ふ数遍順逆ふ巡。列位酔を発しくれバ。諸の頭領等が云先山前ふ出く風景を遊覧し。再び来く飲酌を催そんと。総く二十一人互ふ相攘く階を下り。直ちふ山前ふ馳く。四下の風景を一覧し。第三の関上ふ到りし処。空中ふ救行の賓雁

嗾嗾飛々れバ花栄を看く暗ふ想道。先ふ晁蓋我が弓箭の覚へを信せぞ。改日比試せゝめんと云々ふ今此光雁の内平一ツを射落し。晁蓋等ふ我神妙の藝術を信服せしめんものと。心中ふ込小賊ホふ向く一張の弓一技の矢を乞取。晁蓋ふ對して。長兄嚮ふ某が金銭豹子の尾を射切ゝを全く信じ難ふ及び如。今空をゝれバ屢旅雁充渡る。今又ゝバ第三の雁の頭を射く。其覧ふ入んと欲ス。若万一射損ずゝあゝバ必ず笑ひ物と。ふも終らざるふ。一群数十の雁列を乱さ飛来る。忙しく弓矢打搭へ満くと拽絞。徐ゝひハ第三番目ノ雁ふ向そ。漂と放てバ。箭ゝ第三の雁を射貫く。遂ふ山坡の下ふ墜ふる。小賊これを取く晁蓋ふ献りゝれを。晁蓋ホ見をゝく尽く皆駭然入都く花栄を称して神臂将軍と号せり。就中呉学究再攢嘆しく。花将軍ゝく弓箭の達人ゝふ因く。人皆漢の李廣が神箭ふ比しく。小李廣と称しゝれた。我今平神妙をゝふ称李廣が上ふあ川く。楚の養由基ゝりとも。いんで能花将軍の上ふ出んを則當山陣の福ゝりとそ。此より梁山泊の豪傑ホ挙く花栄を賞び敬ひ。此時諸頭領再び廳上ふ回り入く飲酌をゝ。晩ニゝく酒宴罷り。各退散して歇ゝり。翌日晁蓋再び酒宴を設け。其坐位を殘定し秦明ハ花栄ふ三歳の長ゝれども。花栄ハ秦明ふ。大舅妻の兄ゝれバ。花栄ふ譲く林冲ゲ次第五位ふ坐せしめ。秦明を六位と。劉唐を第七位黄信を第八位ふ坐せしめ。阮小二阮小五阮小七ゲ下ふ燕順王英呂方郭盛鄭天寿石勇杜遷宋万朱貴白勝と序総く二十一人の豪傑。一行ふ坐を定め。大ふ飲酌を開き。互ふ礼を賀し

くるゞ。是より梁山泊つゝ〳〵威勢を増。大船房屋鎗刀鎧甲頭盔
弓箭旗ホを造〳〵め。防ぎを堅固ゝ構へ〳〵。扨宋江父の喪を聞て
故郷へ帰り。思ひの外父宋太公ハ一点の病もなく。宋江却て禍に
遭ふ次弟次の巻ゝ明らし

新編水滸画傳巻之三拾二畢